



11

世界文学全集

ボヴァリー夫人 フロベール／生島遼一訳

女の一生 モーパッサン／新庄嘉章訳



世界文学全集 11

ボヴァリー夫人／女の一生

フロベール／モーパッサン

訳者 生島遼一／新庄嘉章

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／二光印刷株式会社 製本所／大日本製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

ボヴァリー夫人	3
女の一生	353
ギュスターヴ・フロベール	619
ギ・ド・モーパッサン	626

Madame Bovary

by

Gustave Flaubert

Une Vie

by

Guy de Maupassant

ボヴァリー夫人

——地方風俗——

パリ弁護士会会員

前国民議会議長

前内務大臣

マリ・アントワヌ・ジュール セナールに

親愛にして高名なる友

この書の冒頭に、そして献辞の上にあなたの名を記すことを許されたい。この書を発刊しえたのは特にあなたのご尽力のおかげである。あなたのみごとな弁論によって私の作品は私自身にとっても意外の権威を獲得する結果になった。されば、ここに私の感謝のしるしを受けていただきたい。その感謝いかに大なりといえども、あなたの雄弁と献身の高きにはついにおよばざるものであるけれども。

ギユスターヴ・フロベール

一八五七年四月十二日　パリにて

ルイ・ブワイエに

第一部

1

私たちは自習室にいた。すると、校長が制服でない普通服をきた『新入生』と大きな教室机をかついだ小使いをしたがえてはいってきた。いねむりしていた連中は目をさました。みんな、勉強中を不意打ちくったように立ち上がった。

校長はすわれと合図し、それから自習教師のほうをむき、小声で、

「ロジェ君、この生徒をたのむ。二年級へ入れる。勉強と品行がいいようだったら、年相応の上級へ変えることにするから」
扉のうしろの隅っこにひっこんでいるのでよく見え

ないが、『新入生』は十五歳くらいの田舎の子で、私たちみんなより丈が高かった。村の聖歌手よろしく前髪をおかっぱにそろえ、分別くさげに、大そう気まわりわるそうだ。肩幅はひろくないが、黒ボタンのついた緑色のラシャ上着は袖つけのところできゅうくつそうで、ふだんむき出しにしつけた赤い手首が袖の折りかえしの隙間からのぞいていた。青靴下をはいた足がズボンつりでぎゅっとつり上げた黄色っぽいズボンからのぞいていた。みがいてない、鋏をうったがっしりした靴をはいている。

学課の暗唱がはじまった。彼は説教でも聞くように、足を組むこともせず、肱もつかず、謹聴というかっこうで聞いた。二時に鐘が鳴ったとき、自習教師がみんなといっしょに列にはいるんだと注意してやらねばならなかった。

私たちは本教室にはいるとき、手にもっているのがうるさいから、帽子を床にほうりつける習慣があった。帽子が壁にあたってパツとはこりをあげるように、入り口から腰掛けの下をねらって投げる。それがすてきというわけだ。

ところで『新入生』はこういうやりかたに気がつかないのか、見ならってやる勇気がないのか、祈禱がおわっても、まだ帽子を膝の上にきちんとのせていた。

それは毛帽子、槍騎兵帽、丸帽、かわうそ帽、ナイトキヤップ、さまざまの種類をまぜたややこしいかぶりものだった。黙りこくった醜さが白痴の顔の表情を深刻にする、あのなさけない感じの物のこれも一つだ。橢円形で、心骨でふくらませ、下のはしを三筋の輪形のふくらんだ筋が巻いている。つぎに、びろーどと兎の毛交互の菱形模様が赤い線にしきられ、その上に頭のはいるところが袋状になって、てっぺんは多角形の原紙を張り、これにややこしい飾り紐でふちどりをし、そこにきわめて細い長い紐をつけて先端に金糸の小さな飾りがぶらさがっている。この帽子は新調で、ひさしがピカピカ光っていた。

「起立」と先生がいった。

彼は立ちあがった。帽子が落ちた。全クラスが笑った。

かがんでひろいかけると、隣の生徒が脇でこづき落とす。彼はも一度手をのばしてひろった。

「君、かぶとははなしたまえ」洒落つけのある教師がいった。

生徒たちがどっときたので、かわいそうな子どもはまごつき、帽子を手にもっていないのか、床においたものか、頭にのせたものか、わからなくなった。また腰をかけ、帽子を膝におく。

「立って」先生はまたいった。「名前をいいなさい」

『新入生』はせきこんで聞きとりにくい声で、なにかわからない名をつぶやいた。

「も一度いって」

同じようにせきこんでいう言葉が口から出たが、級中の騒音でかき消された。

「もっと大きく」先生はどなった。「もっとはっきり大きな声で」

そこで、大決心をしたといたげに、『新入生』はあんと大きな口をあけ、だれかを呼ぶようなありったけの声で、「シャルボヴァリ」と投げつけた。

わっとおこる喚声、それが金切り声をとまって漸時強音に高まった（口々にさけば、吠え、足ふみし、「シャルボヴァリ、シャルボヴァリ」とはやしたて

る)。どうにか騒ぎがしずまったようでもまだきれぎれに声がひびき、消えのこった花火みたいにクスクス笑いのおさまらぬここかしこの席の列で、突然に、ぶりかえした。

しかし、先生の命令する罰課(訳注 生徒がわるいことをし
たりなまけたときに余分の宿
題を出すこと)の雨のおかげで、教室内の秩序は少しずつ回復した。先生はようやくシャルル・ボヴァリーの名をききとり、それをていねいに発音させ、字の綴(つづり)をきき、読み直させた後、この子を教壇間近のできぬ子をすわらせる席へよんだ。彼はうごきかけたが、もじもじした。

「なにをさがしているんだね」と先生はきいた。

「ぼくの帽……」あたりを不安そうな目つきで見まわしながら『新入生』は憶病(おぼろ)げにこたえた。

「全クラス、また詩五百行の宿題！」おそろしい先生の声が海神(ネプチューン)の叱咤(しった)が荒れる風波をしずめたように、またおこりかける騒ぎの嵐(あらし)をおさえた。「さわぐんじやない！」カンカンになった先生は、自分のお腕帽(わんぼう)の中からとりだしたハンカチで額をふきながら、言葉をにつづけた。『新入生』、君は *Ridiculus sum* (訳注 ラテ
ン語。私は

こっけい) という動詞を二十ぺん書いてくるんだ」

それから少し声をやわらげて、

「なアに、なくなりやせんよ、君の帽子は。だれも盗(と)りやしない！」

一同また静かになった。頭はみなノートの上にかがみ、『新入生』は二時間のあいだ模範的な姿勢をくずさなかった。ときどき、ペン先につきさしてとばす紙玉が顔にあたってインキのとばちりをつけたが、彼は手でそっとぬぐって、目をふせたまま身動きしなかった。

夜、自習室では、机から事務用の代えカフスを出してつけ、こまごました所持品を整頓(せいどん)し、紙へていねいに野(けい)を引いた。私たちが見ると、単語はいちいち辞書をしらべ、いかにも骨をおって、まじめな勉強ぶりだ。このまじめさを持ちつづけたせいだろうが、下級クラスへ落ちたりはしなかった。というのは、彼は規則などは一応よくおぼえたが、自分で書くものを気のきいた表現で書いたりはできなかった。両親が儉約(けんやく)からおそくまで学校へやらずにおいたので、ラテン語の手ほどきは村の坊さんから受けていた。

彼の父は、シャルル・ドニ・バルトロメ・ボヴァリ
ーという旧軍医補で、一八一二年ごろ徴兵事件に連座
して退職になった男だ。そこで、生来せいらいの風采ふうさいよさをえ
さに、彼の容姿におりよくほれこんだあるメリヤス雜
貨商の娘についている六万フランの持参金をとりこむ
ことができた。美男子で、口さきがうまく、拍車を得
意げにひびかせ、口髭くちひげと一つになった頬ほひげをはや
し、指にはいつも指輪をはめ、はでな色の服をきこん
だこの男は、行商人式セイルスマンの安っぽい快活さをもって、い
つかどりの男という感じをあたえた。結婚する
と、二、三年は妻の財産でくらし、美食をし、朝寝を
し、大きな陶器パイプをふかし、夜は芝居見物がすま
ぬと帰らず、カフェ通いにせいだした。妻の父は死
んだがほとんどなにも残さなかった。彼はそれにむか
っ腹をたて、よしおれが《製造業》をやるとのりだし
たが若干損をし、それから田舎にひっこんで、ここ
で、また《経営》をやろうとした。が、農業のことを
かいもく知らぬのはインド更紗さらきの製造の場合とかわら
ず、馬を農場へやって働かせずに自分が乗りまわし、
つくった林檎酒りんごは樽詰たるづめにして売るより瓶びんから自分が飲

み、家でいちばん上等の鶏も自分が食い、豚脂ラードで獵靴
をみがくというしまつで、間もなく、もう事業めいた
ことにいっさい手だしせぬのがましとさとするにいたっ
た。

そこで、年二百フランの契約でコー地方とピカルデ
ー地方の境のある村に、農場と屋敷と半々のような
家を借りた。心はたのしまず、後悔にさいなまれ、天
をのろい、すべての人をねたみつつ、その言いぐさで
は《人間どもにあいそがつきた》そう、あとは余生
をしずかにと決意して、四十五のときからはもう世間
と縁を絶ってしまった。

むかしは彼の妻はぞっこん夫にはれこんでいた。な
にからなにまでいいなりに服従したのがわるく、かえ
って、夫はますます離れて行った。以前は快活で、ほ
がらかで、愛嬌あいきょうもよかった女が、年をとるにつれ（気
のぬけた葡萄酒ぶどうが酔すになるように）氣むずかしく、キ
イキイ声をたて、ヒステリックな女になった。夫が村
の若い娘をおっかけるのを見たり、夜いらんな放蕩場ほうとう
所からふてぶてしい態度で酒くさい息をはきつつ帰っ
てくるのを、はじめはぐち一ついわずにずいぶん苦し

んだ。やがて自尊心が反抗した。と、彼女ははげしい怒りを死ぬまでもちつづけて黙々たる克己心のうちにおしころし、ものをいわなくなった。彼女はたえず用事で出あるいた。代訴人や裁判所長のところへ自分で行き、証文支払い日に気をくばり、猶予をたのんだ。家では、アイロンをかけ、縫いもの洗濯、職人に指図し、掛けの勘定をはらった。そのあいだ、だんなは万事われ関せず顔で、いつもふてくさってねむっているにひとしく、目をさませばいやみをいうか、暖炉のそばで灰に唾をはきながら煙草をくゆらすだけの芸だった。

男の子が生まれると里子にやることにした。この子が家にかえると王子さまのようにあまやかされた。母親はジャムばかりなめさせ、父は靴なしで走らす。進歩派思想家気取りで、子どもは動物の子みたいに裸で歩かせるのがいい、などという。母のやりかたと反対におやじの頭には少年というものに一種の男性的理想があつて、それにしたがって息子をしつけようとし、体のためだとスパルタ式にきびしく育てたがつた。火のけのない部屋にねかせ、ラム酒をぐい飲みするのを

おしえたり、宗教行列をのしることを吹きこんだりした。しかし、生まれつきおとなしい子どもには父親の努力はあまりききめがなかった。母は彼をいつも自分のそばにひきつけた。厚紙を切つてやり、お話をきかせ、わびしいふざけやペチャクチャあまつたれたおしゃべりの多い独白でこの子を話相手にするのだった。孤独に生きている彼女はこの子の頭のなかにこわれてばらばらになった自分の空しい夢をすっかりうつしこもうとした。この子の立身出世を夢み、もう大人になつて、美しく、才気すぐれ、土木課か裁判所の役人の職をえておさまっているところを心にえがいた。

自分で読みかたをおしえ、家にある古ピアノで短い歌の二つ三つをうたえるようにしこみさえした。ところで文芸に気のないボヴァリー氏はいらぬことだと批評した。この子を官立の学校に入れて、役人の株や商売の営業権を買つてやる余裕がいったいあるのか。もっとも「押しさえつよければ男は成功できるものだ」。ボヴァリー夫人はじつと唇をかむ。子どもは村をうろつきあるいていた。

彼は野良ばたらきの百姓のあとにくっついてある

き、土くれを投げて飛びちる鳥を追っぱらった。溝に
そって植わった桑の実をたべ、竿で七面鳥の番をし、
収穫のときは刈草を干し、森の中をかけまわり、雨の
日には教会の入り口で石けり遊びをし、大祭日には堂
守に鐘をつかせてくれとたのんで鐘の大綱にからだご
とぶらさがり綱とともにぶうんとゆれる気分をたのし
んだ。

こうして、彼は櫛のように成長した。がっしりした
手になり、いきいきした血色だった。

十二のとき母親がたのんでこの子に勉強をはじめさ
せることにした。めんどろ見る役は司祭さんというこ
とになった。だが、授業は短く、ときれときれで、た
いして役にたちそうもない。洗礼と葬式のあいだのあ
るかなしかの暇に、聖器室で立ったまま大いそぎでや
る授業だ。でなければ、夕方の御祈禱がすんで外出の
用のないとき、少年をよびにやる。司祭さんの部屋に
はいつて席につく。羽虫や蛾がろーそくのまわりをと
びまわる。暑いから少年はコックリコックリいねむり
した。坊さんも、両手を腹にのっけてうとうとし、や
がて口をあぐりあけて大いびき。またあるときは、

司祭が近所の病人に臨終の聖餐をあたえて帰り道、野
原でいたずらしているシャルルを見つけ、呼んで、ち
よっとのあいだ説教し、その機会を利用して木陰で動
詞変化を練習させたりした。雨がふってきたり、知り
あいの人が通りかかっておじやんになる。もっとも、
司祭さんはこの子にはいつも満足で「若いの」はなか
なかおぼえがいいとはめさえした。

シャルルをこのままうちやってもおけない。母は
頑強だった。おやじは、恥ずかしさからというよりく
たびれて、つよく反対もせず、おふくろの意見にし
た。少年が初聖体拝領の式をすますまで、もう一
年待った。

また半年たった。そのつぎの年、いよいよシャル
ルはルアンの学校に行くことになり、十月の末聖ロマン
の大都市のころ父が自分でつれて行った。

私たちのだれも、この少年のことをいまでは思い出
す者はあるまい。休憩時間にはあそび、自習室では勉
強し、教室では傾聴し、寝室ではぐっすり眠り、食堂
ではよく食う、おとなしい子だった。保護者にガント
リー街の金物問屋がいて、月に一回日曜日には店をし

めてからこの子を外出させ、港へ船を見に行かせ、きっかり七時には夕食前に学校へつれてもどった。木曜日の夜、彼は母親に長い手紙を書いた。赤インキで書き、封蠟を三つ押した。それから歴史のノートを復習したり、自習室にあった『アナカルシス』の古い一冊を読んだりした。遠足のときは小使いと話をした。この小使いも彼のように田舎の男だった。

よく勉強したせいでいつもクラスの中ぐらいにいた。一度、博物で等外賞をもらったりした。しかし、四年生のおわりになると両親は彼に医学をやらせるつもりで、あと独力で大学入学資格がとれるようにいけるだろうというので、学校をやめさせた。

母は知人の染物屋のオー・ド・ロベック川に面した五階の部屋をえらんでくれた。下宿代をきめ、家具つまり机と椅子二つを買い、自宅から桜材の古ベッドをもちこんだうえに、小さな鉄ストーブまで買った。いとし子に寒いめをさせないようにと薪までちゃんと用意して。そうしておいて、これからはひとりなんだから万事行ないに気をつけるようにとくどくいいきかせた後、彼女は週の終わりに帰って行った。

掲示板で見た講義一覧は彼をまず茫然とさせた。解剖学、病理学、生理学、薬学、化学、植物学、臨床学、治療学、それに衛生学と薬物学はもちろんである。どれもこれも語源のわからない名前ばかりで、その一つが厳肅な暗闇にとざされた聖廟の扉のごとく思われた。

さっぱりなんのこともわからぬ。一生けんめい聞いても意味がつかめなかった。しかし彼は勉強した。製本したノートを持ち、すべての講義に出席し、ただ一度も回診を欠かさなかった。自分が骨おってやっていることがわからず目かくしされてその場をまわっている調教中の馬のように日々の仕事をたししていたのだ。

出費を少なくするようにと、毎週母は使いをよこしてオーヴンで焼いた犢肉を一切れとどけ、病院からもどると、靴底で壁をけって足をあたためつつ、それで昼食をした。またそれから講義に、階段教室に、施療病院にかけつける。夜は下宿のまずい夕食をしたあと、部屋へもどり、からだの上で湯気をたてる湿った着物のまま赤いストーブの前で勉強にかかった。

夏の美しい夕方、街路がなま暖かく女中たちが入り口で羽根つきをやっているところ、窓をあけて肱をついた。目の真下に低く、ルアンのこの界限ではきたならしい小ヴェニスといった感じである川が黄に紫にまたは青に橋や鉄柵のあいだを流れている。職人たちが川っぶちにしゃがんで、両腕を洗っていた。納屋からつき出した竿に木綿糸のかせが干してあった。対岸の屋根の向こうに、澄みきった大空がひろがり、沈んで行く赤い陽が見えた。あそこへ行けばどんなに気持ちいいだろう！ 山毛櫨林の下ではどんなにすがすがしいか！ 鼻孔をひらき田舎のいい匂をかごととした。

が、それはここまでではとどいてこなかった。

彼は痩せ、からだつきがのびた。顔はなんだかものうげで生氣なく、かえって人目をひくような風情になった。

自然の成り行きで、なげやりな気持ちからはじめもっていたような確固とした考えをだんだん失ってしまった。回診をなまけ、翌日は講義をやすみ、なまけ心地を味わいつつ、だんだん学校へ出なくなった。

酒場の味をおぼえ、ドミノ遊びに熱中しだした。毎

晩、うすぎたない遊び場にとじこもって、黒い点のついた羊の骨でできた小さな札を大理石テーブルの上でもてあそぶのが、わが自由を行使する貴重な行為のような、自分の品位を高めているような気がした。禁じられた快楽を知る、いわばはじめて世間を知るような感じだ。部屋の入りの握りに手をかけるときほとんど感覚的なよろこびがあった。そのとき、内におさえられていた多くのことがふくれあがった。彼は小唄をおぼえて女たちにきかせたり、ペランジュに心酔し、ポンス酒のつくりかたをおぼえたりし、ついに女を知った。

こういう勉強のおかげで、医師試験にはみごとに落第した。その夜、家では彼の及第を祝おうと待っていたのだ。

彼は徒歩で行き、村の入りの口あたりでとまって、母を呼び出していっさいをうちあげた。母は落第を試験官の不公平のせいにして許してくれた。あとはうまく話してくれるというので彼もやや心を落ちつけた。父のボヴァリー氏は五年後にありのままの事実を知ったが、もうむかしのことだし、自分の血筋の者が馬鹿で